

吹雪峠②

① ガケから落ちたあやこに、おまわりさんは今までのことを聞きだしていました。「では君は、がけから落ち、何もかも忘れてしまったというのかね」「はい…私、何も思い出せません」「ふーん、それは困ったな」吹雪の日に峠から落ちて赤ちゃんと別れ別れになったあやこは、自分の名前も赤ちゃんのこともすっかり忘れてしまいました。

② 「でも私、二三日すれば思い出すかもしれません。それまで、ここにおいでください」「それがいいだろう」

③ 「これは君が着ていたコートだね。ここにあやこ書いてあるが、君はきつとあやこという名前だよ。それから財布があつて、五万円入っているよ」「まあ…」あやこは、何かなんだかわからなかった。さて、こちらでは。

④ 「先生、あの人は名前も何もわからなくなったんですって」「そうだ、困ったものだよ。でも金はあるから、四五日おいてやるといいよ」

⑤ そんなことがあつてから、五日ばかりが夢のように過ぎていきました。あやこは、とにかく東京へ行ってみることにしました。それは、着ていたコートが東京で作ったものだったからです。あやこはおまわりさんに送られて駅へと向かい、村を後にしました。それから、あやこがどこへ行ってしまったのか、どうしているのか、誰にもわかりませんでした。

⑥ やがて春がきて、雪がとけて、小川がさらさらと流れる頃になりました。

⑦ ある日のこと、天吉は、拾った赤ちゃんのおもりをしていました。「天吉や…この子はうちの子にするんだから、拾ったなんて誰にも言うんじゃないよ」「わかったよ、誰にも言わないよ。ひとみちゃんいい子だね。おらの妹だよ。おらが子守唄をうたってやるから、ねんねしな」

⑧ 天吉は子守唄をうたいながら、やがて村へとやって来ました。すると、友達に会いしました。「あれっ、天吉。その子どうしたんだ？」村の子供たちが珍しがって寄ってきました。天吉は、「うん、そのね、この子は…あのね、雪の日に…雪の日に…うーん、父ちゃんが町で買ってきたんだ」そこへ通りがかったのは、大山巡査でした。

⑨ 「おいおい、その子を買ってきたって？その子はどこの子だ。お前のうちの子供じゃないだろう」「この子はおらの妹だよ。ひとみというんだよ」天吉は本当のことを言いませんでした。果して…